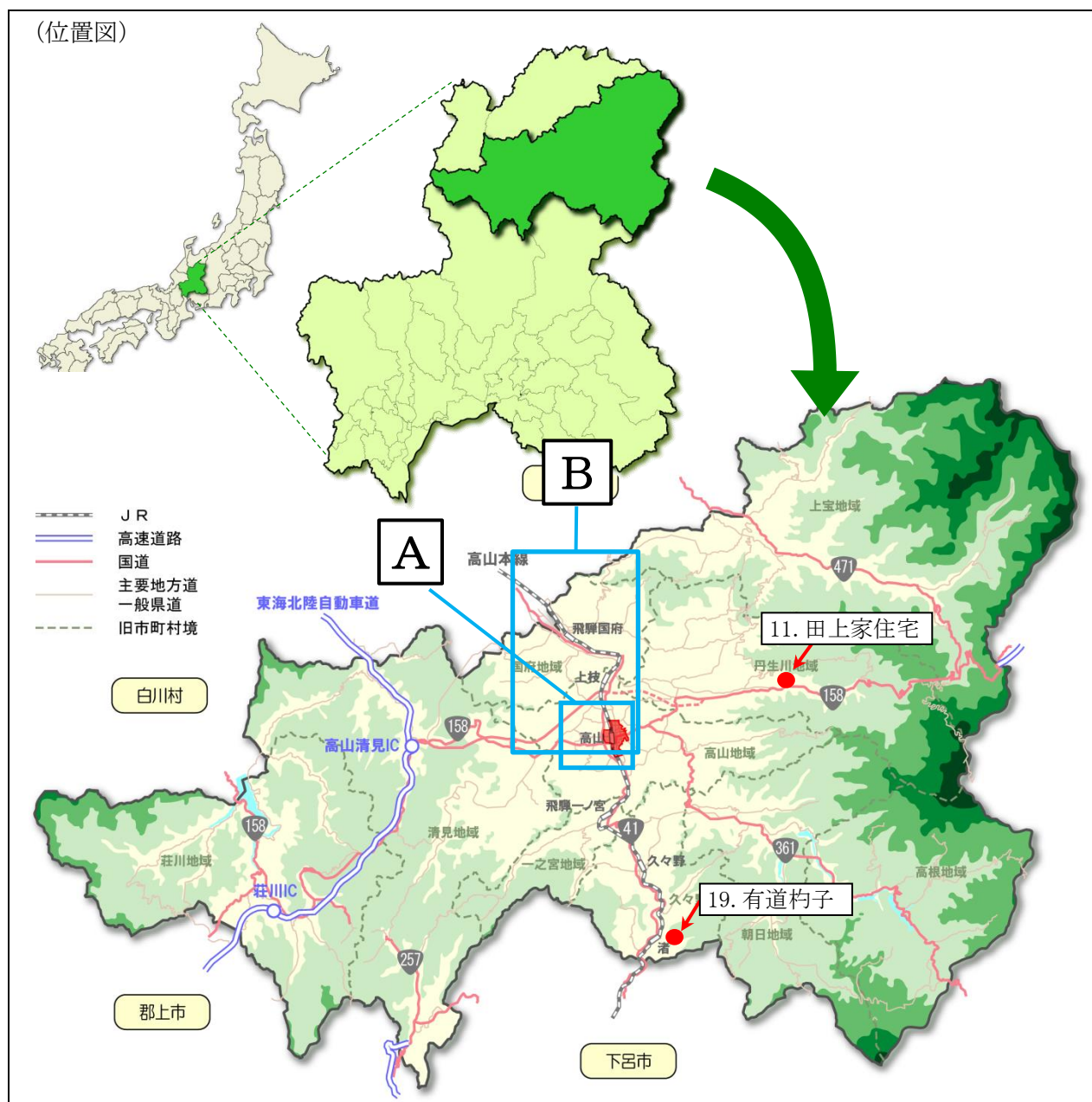


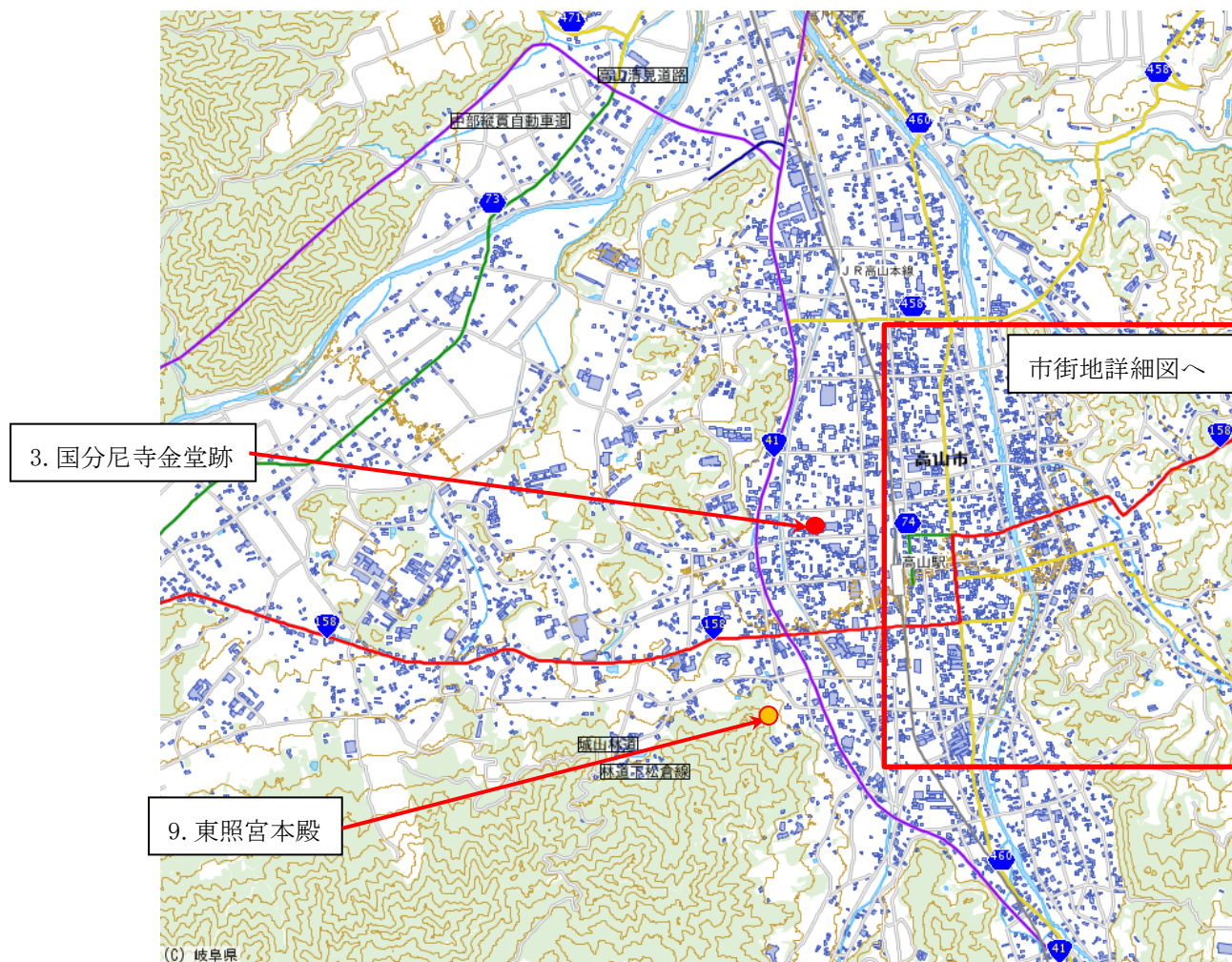
① 申請者	高山市	② タイプ	<div>地域型 / シリアル型</div> <div> <input type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/> C <input type="checkbox"/> D <input type="checkbox"/> E </div>	
③ タイトル				
<small>ひだのたくみ</small> ・飛騨匠の技・こころ 一木とともに、今に引き継ぐ1300年—				
④ ストーリーの概要（200字程度）				
<small>ひだのたくみ</small> 「飛騨工制度」は古代に木工技術者を都へ送ることによって税に充てる全国唯一の制度で、飛騨の豊かな自然に育まれた「木を生かす」技術や感性と、実直な気質は古代から現代まで受け継がれ、高山の文化の基礎となっている。市内には中世の社寺建築群や近世・近代の大工一門の作品群、伝統工芸など、現在も様々なところで飛騨匠の技とこころに触れることができる。 これは私たちが木と共に生きてきた1300年の高山の歴史を体感する物語である。				
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: flex-end;"> <div style="text-align: center;">  <p>国指定重要有形民俗文化財 高山祭屋台の彫刻</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>国指定重要文化財 吉島家住宅の梁組</p> </div> </div>				
⑤ 担当者連絡先				
担当者氏名	高山市教育委員会事務局文化財課 主査 大石崇史			
電 話	(0577) 35-3156	FAX	(0577) 35-3172	
E-mail	bunkazai@city.takayama.lg.jp			
住 所	〒506-8555 岐阜県高山市花岡町2丁目18番地			

市町村の位置図（地図等）



構成文化財の位置図（地図等）

〈A 市街地〉

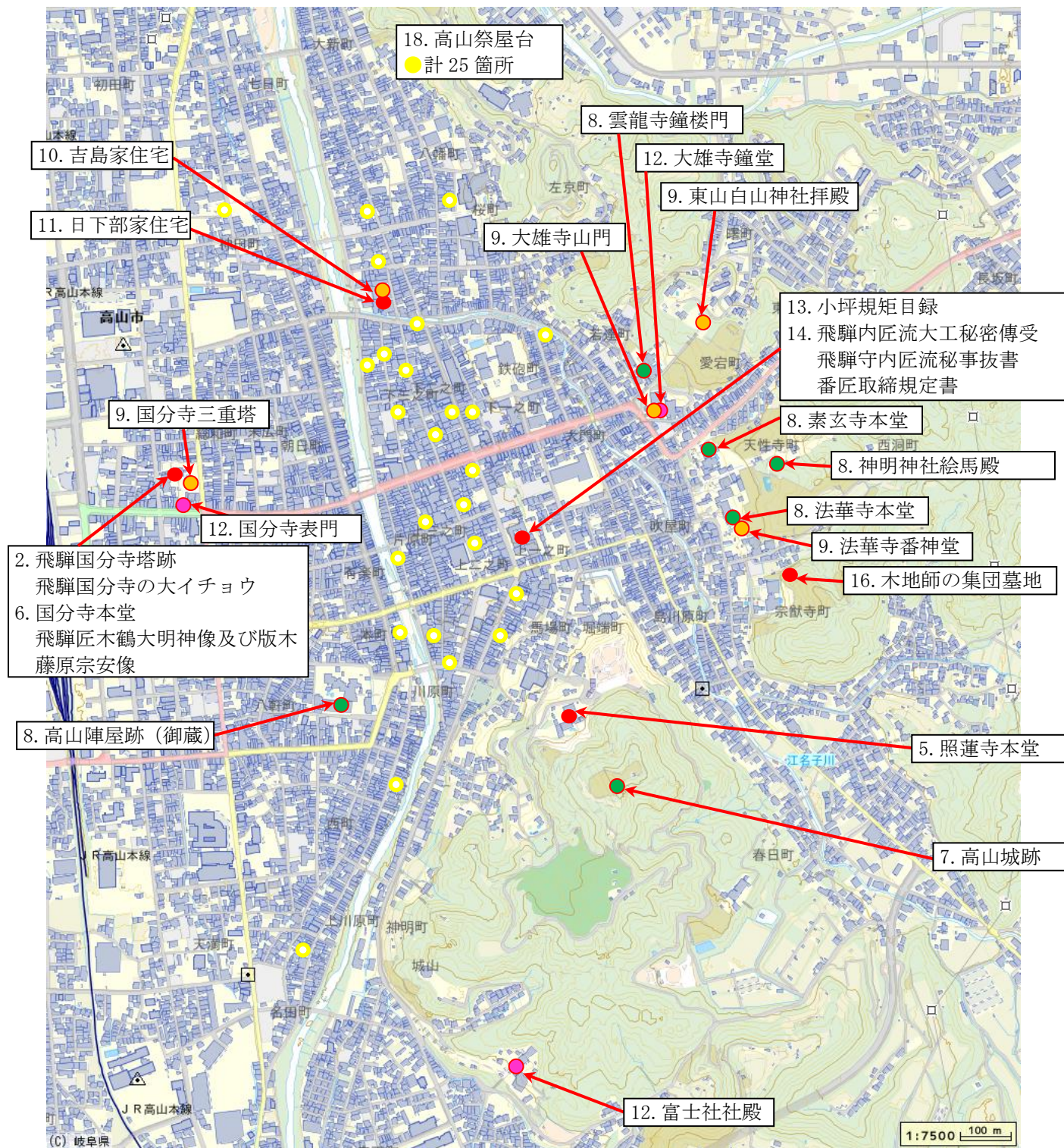


市内（所在地を定めないもの）

15. 飛騨春慶 17. 一位一刀彫

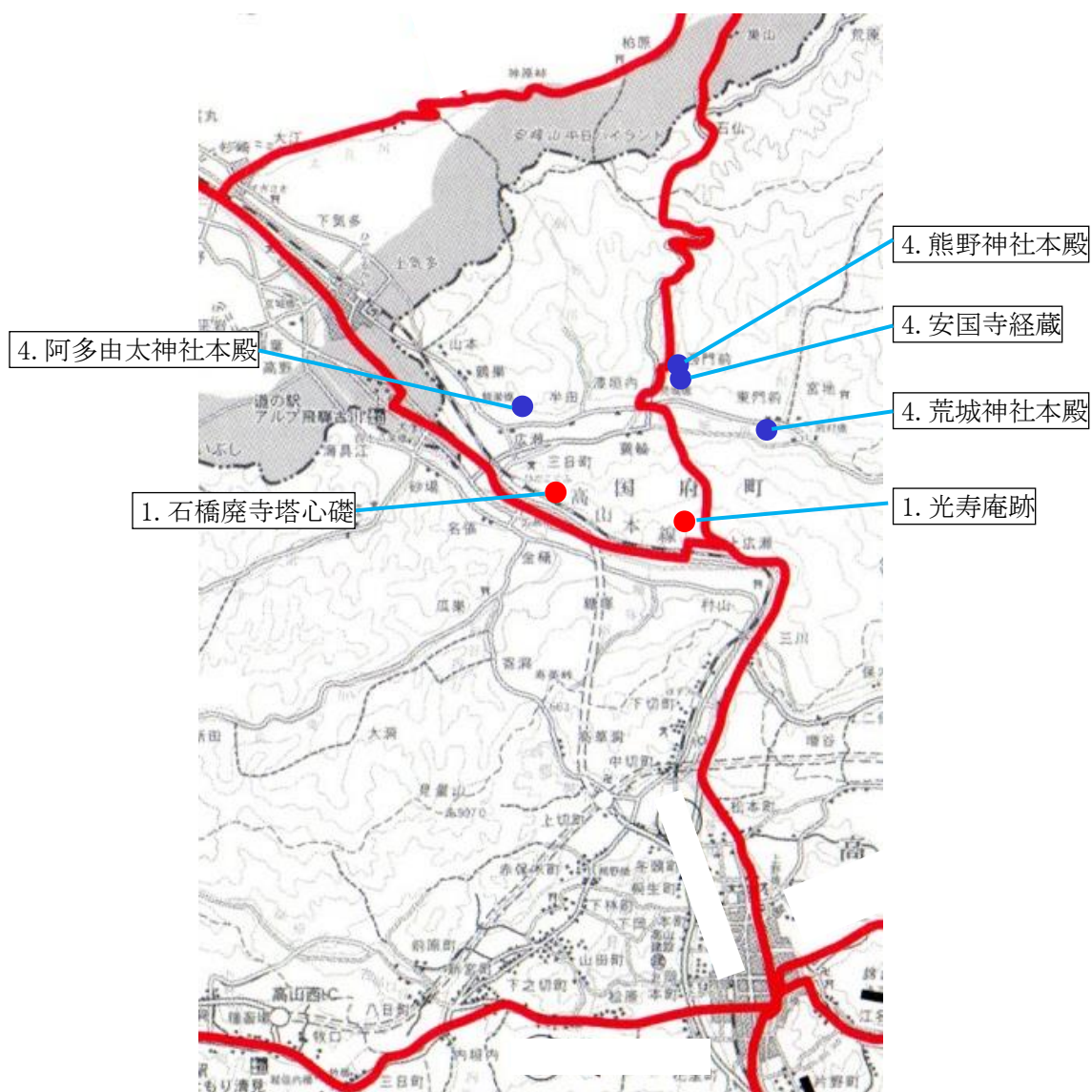
構成文化財の位置図（地図等）

〈A 市街地詳細図〉



構成文化財の位置図（地図等）

〈B 国府地域〉



ストーリー

1. 飛騨工制度と匠の技・こころ

(1) 飛騨工制度

飛騨工制度は、古代における租税制度の中で、飛騨国 1 国のみに対して特別に定められた制度である。養老 2 年 (718) に制定された養老令 賦役令の斐陀国条に、庸、調といった税の代わりに年間 100 人程の匠丁 (技術者) を都へ派遣することが定められている。この匠丁が飛騨工である。

飛騨では、奈良時代以前の古代寺院が 14 箇所以上と、全国でもまれにみる密度で確認されており、飛騨工制度ができる以前から寺院を建てる高い建築技術をもっていたことがわかる。都の造営にあたり木工技術者の需要が高まり、その優れた技術力を活用するため、この制度が設けられたのである。

飛騨工の姿は古代以降、名工の代名詞として文学作品等にも描かれてきた。『万葉集』の「かにかくに 物は思わじ 飛騨人の 打つ墨縄の ただ一道に」(あれこれと迷いはするまい 飛騨人が木材に引く墨縄の線のようにただ一筋に思おう) という恋歌からは、木工技術者として実直に仕事をする飛騨工の姿がみえる。その他、『源氏物語』や『今昔物語集』にも飛騨工が優れた木工技術者として描写されている。古代に都で飛騨工が建てた記録が残る建造物には、甲賀宮、平城宮、平安宮などの宮殿や、西大寺、石山寺、西隆寺などの寺院等が知られており、建築物のほか建具、家具の製作に携わっていた。高山にある飛騨国分尼寺の金堂は全国の国分寺・尼寺の中で唯一、唐招提寺等と同じく前面一間を吹き放しとし、都で得た知識が活用された例である。



国分尼寺金堂跡

飛騨工制度は鎌倉時代、古代律令制度の終焉とともに消滅するが、飛騨匠 (飛騨工制度消滅後の飛騨の木工技術者について「飛騨匠」と記載する) はその後も全国で建築活動を行っている。鎌倉時代の飛騨匠の手による建造物として、西明寺本堂や三重塔 (共に国宝・滋賀県) が現存する。また、現在も「飛騨匠の祖」として崇敬を集める飛騨権守・藤原宗安は、1311 年に長滝寺の大講堂 (明治 32 年焼失・岐阜県郡上市) の大工頭を務めている。

(2) 匠の技とこころ

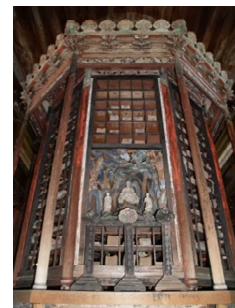
飛騨匠の技術の特徴は木の性質を見極め、それを生かす技術である。飛騨で優れた木工技術が育まれた理由の一つに、豊富な自然がある。高山市は現在でも市域の 92% を森林が占め、豊富な森林資源に恵まれているが、飛騨の山林の他と異なる特徴に、利用できる樹木の種類の多いことがあげられる。普段から多種多様な性質の樹種を使いこなすために磨かれた技術が、世界に通じるレベルまで発展したのが飛騨匠の技術である。また、山に囲まれ、冬は雪に閉ざされる高山の気候は、派手さを嫌い、寡黙で実直な気質を生んだ。この気質は古代以来現在まで受け継がれ、飛騨匠をはじめ高山の文化の基礎となっている。飛騨匠の作品は、正確な技術に基づき、木の美しさを生かし、全体が「こうと」 (= 質素) な美しさにまとめられていることに大きな特徴と魅力がある。

2. 飛騨匠の残した作品

高山では各時代の飛騨匠の足跡をたどることのできる多くの作品や習俗、伝説等が残されている。

(1) 国府盆地の中世社寺建築群

古代寺院跡の多い国府盆地には、中世に遡る建造物も多く残されており、飛騨の社寺建築の流れを知ることができる。荒城神社本殿は明徳元年 (1390) 再建であり、阿多由太神社本殿は室町時代初期の建立、熊野神社本殿は室町時代後期の建立と伝わる。いずれもサワラやヒノキ、スギを多く用いて作られるが、現在では入手困難なほどの良材を使用している。安国寺経蔵は応永 15 年 (1408) 建立で、内部の輪蔵 (回転書架で、一回転すると納入された経典をすべて詠んだことになる) は、日本現存最古のものである。



安国寺経蔵内部の輪蔵

(2) 高山城とゆかりの建築群

近世初期、天正 16 年 (1588) から慶長 8 年 (1603) まで 16 年の年月をかけて飛騨匠たちが建てた高山城は、「城郭の構え、およそ日本国中に五つともこれ無き見事なるよき城地」であったと、近世中期

の地誌にも書かれた名城であった。城は元禄8年(1695)に取り壊されたが、それ以前に高山城から移築された建物が東山の寺院群等の建物として残されており、それらを巡ることで今は無き名城高山城をしのび、商家町として発達する以前、城下町として出発したころの高山を感じることができる。

神明神社絵馬殿は城内の月見平にあった月見殿、雲龍寺鐘楼門は黄雲閣を移築改修したものである。素玄寺本堂は三ノ丸の評議所を移築したもので、同じく城内から移築された法華寺本堂とともに書院造の面影を残すものである。また、高山陣屋内の御蔵も三ノ丸の米蔵を移築されたものである。

これらの建物は比較的細い部材を使うが、簡素な中に優雅さと、通常の社寺建築とは異なる力強さを感じさせる。これも飛騨匠の用材の見事さとセンスによるものである。

(3) 近世・近代の匠達

飛騨の社寺建築の美しさの一つに、屋根の優美さがある。飛騨の山々の形に似た美しさを見せる社寺建築の屋根の曲線は、親方から代々伝わる口伝を基に、棟梁の感性によって形作られる。装飾で飾られても、全体を見るとすっきりと簡素に見えるのも、職人の技と感性によるものである。町人文化が発達した近世以降、制作者である職人に加え、発注者であり文化の主要な担い手である旦那衆、作品を評価する周囲の町人の三者の優れた感性によって、高山では多くの名建築や工芸品が生まれてきた。

近世飛騨の社寺建築は、和様を基本として柱上の組み物などに他地域とは異なる独自性が見られる。通常のヒノキやスギでなく、カツラやクリ、マツなど多彩な木材を使うことも大きな特徴であり、ここにも木材を知り尽くした飛騨匠の技を見ることができる。この時代、代々木工を職とする一門が多く現われ、飛騨匠の技の伝承がなされた。このうち、飛騨権守・藤原宗安の直系とされるのが、江戸時代中期以降4代にわたり「水間相模守」を名乗り、優れた彫刻を特徴とした水間一門である。高山中心



法華寺番神堂の彫刻

部には二代目による大雄寺山門や法華寺番神堂、三代目による東山白山神社拝殿、国分寺三重塔がある。また、周辺には東照宮本殿、願生寺本堂、福成寺本堂、速入寺本堂、円徳寺鐘楼等多くの作品があり、一門の作風を知ることができる。水間相模は代々社寺建築を専らとしたが、その流れをくむ者の作品には、それ以外のものもある。村山勘四郎訓繩は彫刻に秀で、相模と共に高山祭屋台を作り、その子民次郎英繩も多くの高山祭屋台を建造改修している。西田伊三郎は木の美しさを最大限生かし、吹き抜けの梁組が特徴的な、近代民家の代表例とされる吉島家住宅を作った。



吉島家住宅の吹抜

(4) 木を生かす伝統工芸

木の美しさを生かす技は、建築以外にも発揮された。400年前に高山で生まれた飛騨春慶は、江戸時代初期、打ち割った木の木目を生かすために透明な漆で盆に仕上げたことに始まる漆器で、透明で木地の木目が見える漆を用いるため、素材の見立て、加工から漆塗まで全てにわたって高い技術が要求される。宗猷寺には山中を移動しながら木地椀などを作った江戸時代中期以降に築かれた木地師の集団墓地が残されている。一位一刀彫



飛騨春慶

一位一刀彫は江戸時代後期、色彩を施さず、イチイの木が持つ木の美しさを生かした彫刻として完成された。これらの伝統工芸の技術や木工技術の粋を結集して作られたのが高山祭屋台である。



一位一刀彫

古代に生まれた飛騨匠の文化は、飛騨の豊かな自然と豊富な木材に関する知識・経験をもとに、人々の実直な気質によって育まれてきた。これは木と共に生きた1300年の高山の歴史を体感する物語である。

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※ 1)	指定等の状況 (※ 2)	ストーリーの中の位置づけ (※ 3)	文化財の所在地 (※ 4)
ひだのたくみ 飛驒工制度				
1	いしばしはいじとうしんそ 石橋廃寺塔心礎 石橋廃寺跡出土品 こうじゅあん 光寿庵跡 光寿庵跡出土瓦	市有形(考古資料) 市有形(考古資料) 市史跡 県重文	飛驒では 14 箇寺以上と全国屈指の密度で古代寺院が見つかっており、飛驒工制度が成立する背景となった。国府地区は中でも特に多く見つかった地区である。石橋廃寺や光寿庵跡はその内の一つで、礎石が見つかった。共に都で働く官人を描いた瓦が出土しており、飛驒匠の都とのつながりを示す。	
2	飛驒国分寺塔跡 飛驒国分寺の大イチョウ	国史跡 国天然記念物	古代の国分寺・国分尼寺は高山盆地に建てられた。それぞれ礎石が現存する。国分寺塔跡には七重塔が建っていたが、建設の際、柱の寸法を間違った棟梁に、娘が柱の上に桁組を置くアイデアを教えたが、その秘密を守るために娘は自ら命を絶ち、そこに墓標として植えられたのが国分寺の大イチョウだという悲しい伝説が残されている。	
3	こくぶん に じ 国分尼寺金堂跡	市史跡	飛驒国分尼寺は発掘によって礎石配置が判明したが、奈良・唐招提寺等と同様、前一間を吹き放しとしている。この構造をもつものは全国の国分寺・国分尼寺のなかでここだけである。飛驒工が都で培った知識・経験を發揮して作った一例である。	
中世社寺建築群				
4	あんこくじきやうぞう 安国寺経蔵 あらか 荒城神社本殿 あたゆた 阿多由太神社本殿 くまの 熊野神社本殿	国宝 国重文 国重文 国重文	古代寺院が多数見つかかり、古代における飛驒匠の活動の一大拠点でもあった国府地域では、室町時代の社寺建築が今も多数残り、当時の匠達の技術を伝える。 安国寺経蔵は応永 15 年(1408) 建立で、内部の八角輪蔵は現存日本最古の輪蔵(回転書架)である。輪蔵には当時、明から入手した大蔵経(現存 2000 帖)が納められている。	

			荒城神社本殿は明徳元年（1390）再建、阿多由太神社は室町時代初期、熊野神社は室町時代後期の建立。部材はいずれも地元のサワラ、ヒノキ、スギなど、現在では入手困難のほどの良材を用いて作られている。	
5	照蓮寺本堂 <small>しょうれんじ</small>	国重文	高山地域における中世の飛騨匠の活動を知ることのできる建物。照蓮寺本堂は昭和 35 年に莊川地区から移築されたもので、浄土真宗本堂建築のうち国内現存最古のもの。長さ 7 間の長大な梁、非常に緻密な木目の板材等、飛騨の良材をふんだんに使う。旧所在地は上白川郷と呼ばれた飛騨の中でも奥まった所であり、飛騨山中における当時の建築活動の在り方を示す。	
6	国分寺本堂 飛騨匠木鶴大明神 像及び版木 藤原宗安像 <small>ひだのたくみもつかくだいみょうじん ふじわらむねやす</small>	国重文 市有形民俗 未指定	本堂は室町時代の作で、高山地域における中世の飛騨匠の活動を知ることのできる一例。本堂には木鶴大明神像や藤原宗安像が安置されている。 木鶴大明神像は飛騨匠の一人と考えられた平安時代の名工・韓志和の像（藤原宗安像ともいう）で、古くから崇敬を集めてきた。国分寺の木鶴大明神の御札は「匠講」の構成員に配られている。 藤原宗安は飛騨権守と名乗った鎌倉時代末の大工。長滝寺大講堂（焼失・郡上市・旧国宝）、高富白山神社（山県郡・重文）などを建て、現在も飛騨匠の祖として崇められている。	
高山城とゆかりの建築群				
7	高山城跡 <small>たかやまじょうせき</small>	県史跡天然記念物	高山城は天正 16 年（1588）から慶長 8 年（1603）にかけて、飛騨匠達が 16 年の年月をかけて建てた平山城で、近世中期、高山陣屋の地役人によって書かれた地誌『飛騨国中案内』には「城郭の構え、およそ日本国中に五つともこれ無き見事なるよき城地」とされた名城であった。城は元禄 8 年（1695）に取り壊され、わずかに残る石垣等に在りし日の姿を偲ばせる。	

8	うんりゅうじしやうろうもん 雲竜寺鐘楼門 そげんじ 素玄寺本堂 しみんじんしゃえうまでん 神明神社絵馬殿 ほっけじ 法華寺本堂 じんや おんくら 高山陣屋 (御蔵)	市有形 (建造物) 市有形 (建造物) 県重文 県重文 国史跡	飛騨匠達が 16 年の年月をかけて建てた高山城は、寒冷地で瓦が割れるため屋根は板葺にするなど、飛騨の特性に合わせて作られていた。元禄 8 年 (1695) に取り壊される以前に移築された建物が現存している。 雲龍寺鐘楼門は慶長 6 年 (1601) に城内の黄雲閣を移築したもの。 素玄寺本堂は寛永 12 年 (1635)、三ノ丸にあった評議場を移築したもの。 神明神社絵馬殿は元禄 8 年 (1695)、高山城取り壊しの際に城内の月見殿を移築したもの。 法華寺本堂は 17 世紀前半、高山城内の建物を移築したもの。 いずれの建物も通常の社寺建築と異なり、屋根の小屋組は細い部材を貫で補強する構造となっており、内外の意匠も寺院らしさが見えず書院造となっている。 また、高山陣屋の御蔵も高山城取り壊しの際に三ノ丸の米蔵を移築したもの。 近世初期、飛騨匠が造った城郭建築の姿を知ることができる建築群。	
近世・近代の匠達				
9	みずまきがみ [水間相模の建築群] くにふくしんさんじ 国分寺三重塔 だいおうじ 大雄寺山門 ひがしやまはくさん はいでん 東山白山神社拝殿 ほっけじ ばんじんどう 法華寺番神堂 とうしやうくわん 東照宮本殿	県重文 市有形 (建造物) 未指定 市有形 (建造物) 県重文	「飛騨匠の祖」として崇敬を集める飛騨権守・藤原宗安の直系とされるのが、江戸時代中期以降 4 代にわたり「水間相模守」を名乗り、優れた彫刻を特徴とした水間一門である。市内中心部には国分寺三重塔、大雄寺山門、東山白山神社拝殿、法華寺番神堂があり、その他、周辺地域には東照宮本殿、願生寺本堂、福成寺本堂、速入寺本堂、円徳寺鐘楼等、多くの作品が残されている。	
10	[水間一門の流れをくむ建築群] よしじま 吉島家住宅	国重文	吉島家住宅は四代水間相模に師事した西田伊三郎により明治 40 年 (1907) に建てられた町家建築。土間の吹抜けの梁は木の美しさが際立つように高い技術によって加工され、束と梁が整然とした構成となる。伝統に基づき、全体	

			としてこれ見よがしでない簡素な美しさを見せる。高山における町家建築の白眉。国府地域にある清峯寺観音堂も西田伊三郎の作。	
11	<small>かわじり じ すけ</small> [川尻治助の建築群] <small>く さ かべ</small> 日下部家住宅 <small>たうえ</small> 田上家住宅	国重文 市有形（建造物）	<p>川尻治助は飛騨の大工の名門、谷口家の谷口延恭に師事した。彫刻の名手でもあり、一刀彫<small>いっとうぼり</small>の名品も残している。</p> <p>明治 12 年（1879）に建てられた日下部家住宅では、これまで社寺建築に使われていた軒裏の「セガイ」を民家に取り入れるなど、高山の近代民家建築を切り開いた。吹き抜けの梁組はスケール感を感じさせ、隣合う吉島家との対照性を感じさせる。</p> <p>田上家住宅は明治 15 年（1882）、街道沿いに建てられた農家建築。町家建築である日下部家住宅と共通の意匠を取り入れ、内部も贅を凝らした造りとなる。</p> <p>ともに近世までの規制から解放され、銘木をふんだんに使い、意匠も凝らし、棟梁<small>とうりょう</small>が技術とセンスを最大限発揮した近代民家建築の代表作。</p>	
12	<small>だいおう じ しやうどう</small> [松田一門の建築群] 大雄寺 鐘 堂 <small>おもてもん</small> 国分寺 表 門 <small>ふ じ しや</small> 富士社 社 殿	県重文 市有形（建造物） 市指定（建造物）	<p>松田家は江戸時代前期より活躍する大工の家系で、なかでも太右衛門は多くの作品を残し、また優れた弟子も多く育てている。</p> <p>大雄寺鐘堂は元禄 2 年（1689）、太右衛門の父・又兵衛<small>またべゑ</small>の作。</p> <p>国分寺表門は元文 4 年（1739）、太右衛門の手による。また、富士社社殿は寛延元年（1748）に太右衛門により建てられた、現存数少ない神社建築。これらの他、正宗寺本堂、了徳寺本堂<small>りやうとく じ</small>、東等寺本堂、随縁寺本堂<small>ずいえん じ</small>、円徳寺本堂<small>えんとく じ</small>、歓喜寺本堂等、多くの作品を残している。</p>	
13	<small>こつぽ か ね</small> 小坪規矩目録	未指定	<p>正徳 2 年、名工・松田太右衛門<small>た とう へいもん</small>によって書き写された大工の雛形本。技術伝承の様相を伝える。</p>	
14	<small>たぐみ</small> 飛騨内匠流大工秘密傳受 <small>ひだのかみ</small> 飛騨守内匠流秘事抜書 <small>ばんしやう</small> 番 匠 取締規定書	未指定	<p>「飛騨内匠流」の大工の作法や屋根の曲線の出し方等を記したもの。大工秘密傳受は正徳 3 年、秘事抜書は宝暦 7</p>	

			年の日付がある。番匠取締規定書は明治 3 年に改正された、大工仕事をする上での心掛け等が記されたもの。宝暦年中に決められ、文化・文久年間にも一部改正されている。近世飛騨の大工の技術の実態とその伝承の様相を伝える。	
木を生かす伝統工芸				
15	飛騨 ^{しゅんけい} 春慶	記録作成等の措置を講ずべき無形文化財 伝統的工芸品	400 年前、大工が持参したサワラの打ち割った木目の美しさを生かすため、金森宗和（飛騨国主金森可重の長男で後に ^{そうわ} 宗和流茶道の開祖となった）が透明な漆で盆に仕上げることを命じたことに始まる漆器で、透明で木地の木目が見える漆を用いるため、素材の見立て、加工から漆塗まで全てにわたって高い技術が要求される。高山を代表する伝統工芸の一つである。	
16	木地師 ^{きじし} の集団墓地	市有形民俗	木地師は良質な木材を求めて山々を渡り歩き、椀の木地等を作成する職業集団である。山林資源に恵まれた飛騨には木地師の足跡が残されている。宗猷 ^{そうゆう} 寺には宝永 8 年（1711）以降に築かれた 93 基の木地師の墓が残されている。	
17	いち いっとうぼり 一位一刀彫	未指定 伝統的工芸品	江戸時代末、イチイの木を材料とし、色彩を施さず、イチイの木が持つ木の美しさを生かした彫刻として完成された。一刀彫師には大工の一門の流れをくむものも多く、工芸にとどまらず、建築装飾を支えた。	
18	たかやままつり 高山祭屋台	国有形民俗 県有形民俗	高山祭屋台は大工、彫刻、漆をはじめ飾金具、鍛冶など、高山の職人の技術を総動員して作られた傑作である。江戸型の山車 ^{だし} を祖形とし、上方の装飾 ^{かみがた} やかからくり人形を取り入れて成立したもので、からくり人形を横から操る仕組み、屋台の方向転換に用いる戻し車 ^{もどぐるま} など、高山独自の形に進化した。背が高く下段が小さいため一見不安定に見えるが、全体を見ると優美な姿を見せるアンバランスの美がある。また、各部は多くの飾金具 ^{かざりかなぐ} や彫刻で飾られるが、全体でみると落ち着いた美しさを	

			もつ。このようなバランスの良さと奥ゆかしさこそが、高山の伝統的な感性であり、町人の美意識とそれに応える職人の技術によって作り出されるのである。現在も市の技術認定を受けた高山の職人たちによって維持修理が行われている。	
19	うとうしゃくし 有道 杓子	市無形民俗	江戸時代以来、久々野地域の有道地区に伝わるしゃくし。材質のホオノキは材質が比較的柔らかく、素朴な色合いを持つ白木で、乾燥しても形が変わらない。これを一本の木から削り出して作製するため、丈夫で実用性も高い。大工のみならず、高山に住む皆が木に対する知識と経験を有することを示す例。	

構成文化財の写真一覧

1-1.石橋廃寺塔心礎



1-2.光寿庵跡出土瓦



2-1.飛騨国分寺塔跡



2-2.飛騨国分寺の大イチョウ



3.国分尼寺金堂跡



4-1.安国寺経蔵



4-2.荒城神社本殿



5.照蓮寺本堂



6-1.国分寺本堂



6-2.飛騨匠木鶴大明神像



7.高山城跡



8-1.雲龍寺鐘樓門



8-2.法華寺本堂



9-1.国分寺三重塔



9-2.法華寺番神堂



10.吉島家住宅



11-1.日下部家住宅



11-2.田上家住宅



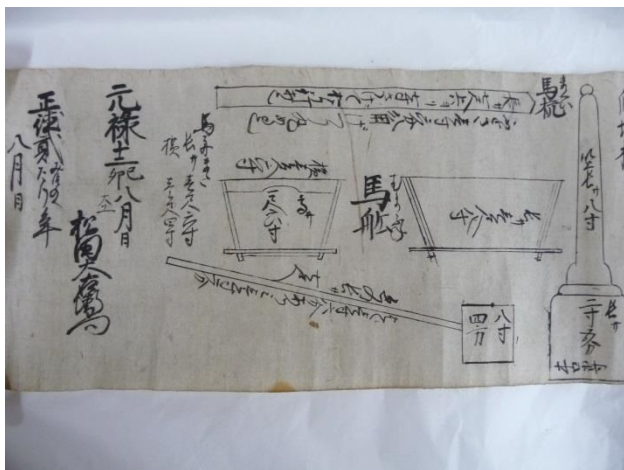
12-1.大雄寺鐘堂



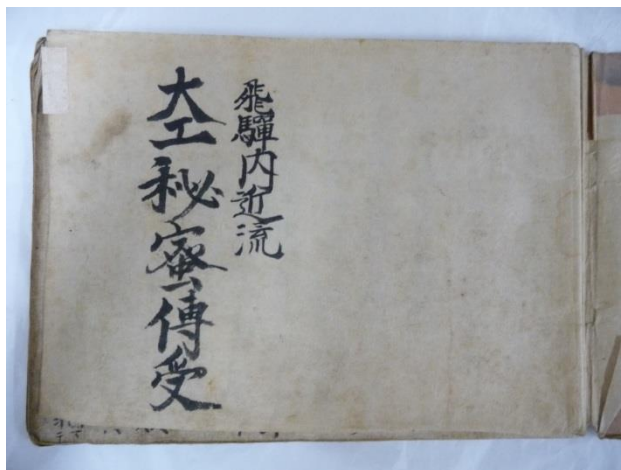
12-2.富士社社殿



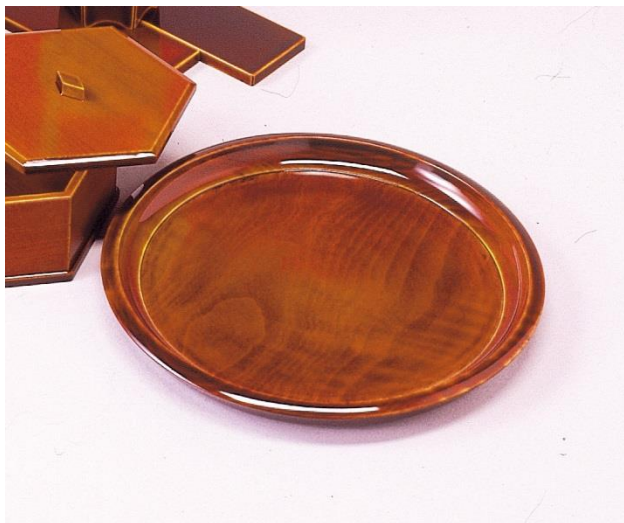
13.小坪規矩目録



14. 飛騨内匠流大工秘密傳受



15.飛騨春慶



16.木地師の集団墓地



17.一位一刀彫



18.高山祭屋台



19.有道杓子

